

第4班研究会 2009年5月25日(火) 18時～20時30分、学士会館309室

報告2

報告者：野田 仁 (早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手)

題目：「ロシア帝国の東方国境とカザフ草原：清朝の多民族支配との比較から」

本報告は、報告者がおもに扱ってきたカザフ草原の事例(1757～1850年代)に基づき、ユーラシア史において広大な支配領域を有していた二つの帝国、ロシアと清朝に注目し、両者間の長い国境地帯ゾーン(アムールからアフガニスタンまで)における帝国の支配秩序の違いを比較することを目的とする。この作業が可能になるのは、カザフ草原が、境界領域として帝国間の境界・異なるシステムの接合する狭間となっていたからであり、結果として両帝国の接触・衝突の場となったからである。また、報告の中では、「境界」を手がかりとして、両帝国を主とした、内陸アジアにおける国際秩序の変容を考察することも視野に入れていた。

まず、予備的考察として、内陸アジア国際関係史の研究動向を整理し、また清朝における「朝貢システム」論を踏まえカザフ草原が2つの帝国にとって、どのような地位に置かれていたかについて概略を述べた。その中で重要な意味を持つのは、清朝においては、カザフは境界の内外に牧地を持つ存在であり、しかも後にその領域の多くがロシアに属することになる点であると考えられる。そのことが両帝国間に置かれたカザフ草原の立場を定め、またカザフの遊牧地に隣接する新疆北部の境界を流動的なものとしていたからである。

続いて、露清およびカザフの三者の立場の比較を行った。清朝はカルンと呼ばれる哨所を結んだ線を防衛線とし、異民族の管理に当たっていたが、清朝政府におけるカザフ(およびその向こうのロシア)への意識が薄くなっていく過程に並行して、1750年代当初の境界認識は揺らぎ始め、カルン線が境界線になっていくことを示した。その中で「ロシアに帰属するカザフ」という認識も見られるようになったのである。

対するロシアでは、1822年以降、カザフの中ジューズについて「西シベリア」化を進めたが、そのとき設置された管区が、カザフの牧地を帝国に取り込む装置となっていた。清朝がバルハシ湖までのカザフの遊牧地をも自領とみなしていることを知っていたロシアは、清朝に配慮しつつ支配の拡大を進めたが、1830-40年代に、清朝の拘る点を精査した上で、より積極的な方針に転換していたのである。

カザフの立場については、時間の関係でくわしく触れることはできなかったもので、ここまでの考察—おもにカザフ草原をめぐる露清関係に相当—からまとめられることを記しておく。

第一に、この時代の内陸アジアの国際秩序が、ジューンガル政権の崩壊後の「空白」の整理を主にしていることがあり、その点で東北アジアの状況とも併せて論ずる必要がある。その原因の一つに、内陸アジアにかんする露清間の条約が定められなかったことにあるが、その結果、政治・経済的に閉じていない空間が成立し、またこの空間—ジューンガル旧領のアルタイ、カザフ草原、クルグズ、(コーカンド等)—は露清間の緩衝地帯にもなっていた。

第二に、内陸アジアにおける秩序再編の構造を考えた時に、清朝側から見れば、1820年代以降、北方から新疆への関心を失っていく状況があったと考えられる。その過程で、とくにアルタイ・イルティシュ川上流域における「境界の経験」は、その後新疆南部にも応用され、境界の固定化につながっていったとみなし得る。一方のロシア側から見れば、1836-37年前後から本格的にカザフ草原へ進出する体制が整ったことが見て取れ、この2つの流れの一致が1850年前後における秩序再編への鍵となっていたことは確かである。

第三に、本報告では十分に検討できなかったが、両帝国の辺境統治システムの違いは大きかった。カザフの場合でも、ロシアへの帰属の根拠となる臣籍の宣誓と、清朝との関係の基礎となっていた爵位では、その縛りつける強さはまったく異なっていたと言ってよい。それは、ロシア＝カザフ関係における、属人的な関係から属地的把握への移行とも大きく関わっていると考えられる。

質疑においては、さまざまな視点から質問が寄せられたが、清朝の立場からは、朝貢システム論を当てはめることの是非が問われ、またカザフの「朝貢」と貿易との関係について疑問が寄せられた。ロシア側の視点からは、カザフ・アルタイなどの状況とコーカンド以南をどこまで一括りにして考察し得るのかという疑問があり、これらは今後の課題として検討を続けることになろう。より大きな視点では、2つの帝国間における諸集団の動向が、翻って帝国側にどのようなインパクトを与えていたのかという問いがあり、前半の黛報告と併せて、さらに比較を行うことが求められよう。

(文責：野田)